

第4章 オンライン外部教材を用いた 英語科目設計

坂本 美枝¹，半田 純子²，杉村 雅之³，西村 千春⁴，東海林 康彦⁵

1. サイバー大学英語科目カリキュラム変更の背景

サイバー大学英語科目は、日本初のフルオンライン大学として本学が開学した 2007 年時カリキュラムにおいて、必修科目として 6 科目（1・2 年次配当）、選択科目として 4 科目（3・4 年次配当）が設置された。2012 年度まで運用されたこの開学時カリキュラム（旧カリキュラム）英語科目は、サイバー大学講義科目の基本フォーマットを用い、VOD (Video On Demand) 形式で設計／開発されたものである。各英語科目設計の土台となっているのは、本学の「教養的能力」に関するディプロマ・ポリシーのひとつ「外国語力：国際人として職務を遂行する際に役立つ基礎的なレベルで、英語、もしくは中国語を、読み、書き、聞き、話すことができる」であり、さらに、このような能力を涵養するべく定められた「英語科目コアコンピテンシー」である。コアコンピテンシーは英語運用能力に関する 4 技能を 2 つに分け、それぞれ以下のように整理している。①「読む力と書く力：英文資料を読んだり、e メールなどを使い英文メッセージで用件を伝えたりすることができる」②「聞く力と話す力：資料を参考にしながら時事的なトピックの概要を理解したり、基本的な日常会話の表現を用いて英語でコミュニケーションをすることができる」。

上記のような英語運用能力を備えた人材を育成できるよう、開学から 2012 年度まで旧カリキュラム英語科目を運営した結果、大きな要改善点が浮かび上がってきた。カリキュラム全体については、とくに必修英語科目において、②の英語コミュニケーションに関わるコンピテンシーを効果的に習得できる科目構成になっていないという点が問題であった。また各科目の設計についても、英語コミュニケーション能力育成により適した形式を採用するだけでなく、より学習者のニーズを反映したものにする必要があるという結論に達した。

1 サイバー大学 IT 総合学部・教授

2 青山学院大学ヒューマンイノベーションセンター・研究員

3 サイバーユニバーシティ株式会社・システム部

4 サイバーユニバーシティ株式会社・システム部

5 サイバーユニバーシティ株式会社・学務部

表1 英語科目一覧 (旧カリキュラム)

必修	1年次	イングリッシュ・リーディングⅠ イングリッシュ・ライティングⅠ イングリッシュ・リスニングⅠ
	2年次	イングリッシュ・リーディングⅡ イングリッシュ・ライティングⅡ イングリッシュ・リスニングⅡ
選択	3年次	総合英語A(リサーチ) 総合英語B(プレゼンテーション)
	4年次	総合英語C(スピーチ・ライティング) 総合英語D(インタビュー)

カリキュラムの改革は以下のように行われた。旧カリキュラムの英語科目構成は表1のとおりである。必修科目は中心的に扱うスキルごとに分かれ、それぞれ1・2年次に1科目ずつ担当されていた。このうち、主に「イングリッシュ・リスニングⅠ」「イングリッシュ・リスニングⅡ」の2科目で、リスニング能力とスピーキング能力の育成・向上を図ってきた。しかし、総合的な英語運用能力の向上を目指し、4技能を鍛えるタスクをバランスよく配置した選択科目「総合英語」4科目に比べると、この構成は、学習者が十分に英語コミュニケーション能力を習得できる機会を提供しているとは言いがたい。よって、各科目が扱うスキルやコアコンピテンシー達成のために必要な単位数など、カリキュラム全体の抜本的な見直しを行った。その結果、すべての科目で4技能を鍛えることのできる授業を、レベルごとに積み重ねていくことにより、英語運用能力、とくに英語コミュニケーション能力を効果的に身につけていくことができる科目構成とした。表2のように、2013年度より運用が始まった新カリキュラムでは、必修科目・選択科目ともに4科目ずつとなり、科目ごとにレベルを設定した。このレベルを段階的に学習させる必要があるため、英語科目の履修は1学期に1科目と制限を設けている。

表2 英語科目一覧 (新カリキュラム)

必修	1年次	基礎英語Ⅰ、基礎英語Ⅱ
	1、2年次	中級英語Ⅰ、中級英語Ⅱ
選択	1、2、3年次	上級英語—生活Ⅰ、上級英語—実務Ⅰ、 上級英語—生活Ⅱ、上級英語—実務Ⅱ

各科目の授業設計については、講義を視聴してから付随する課題に取り組むというVOD形式を改め、学習者が主体的にタスクと向き合い学習を進めていく演習形式を取ることにした。ここで慎重に検討する必要があったのは、本学の学生たちの特徴とそのニーズであった。フルオンラインで教育を行っている大学であるという性質上、サイバー大学では社会人学生が7割を超えており、幅広い年齢層にわたる学生たちの、本学入学以前の学習歴や入学動機もさまざまである。ひとつの科目内で、英語運用能力と英語学習へのモチベー

第4章 オンライン外部教材を用いた英語科目設計

シオンに大きな差のある学習者がともに学ぶという状況に適切に対処しなくてはならない。そのため、学習者それぞれが、より高い自由度をもって学習できる授業を設計することとした。社会人学生であれば職務の状況や、それぞれの英語力と意欲の度合いなどによって、学習者が自分に合った進捗ペースで、自分の伸ばしたいスキルや関心のあるテーマをある程度選択できることが望ましいと結論づけたのである。

授業設計段階において、自由度の高い学習を可能にし、英語コミュニケーション能力を培うことのできる演習授業を実現するために、どのような教材を使用するかが次の重要課題となった。VOD形式の教材ではなしえない、インタラクティブな仕組みをもった豊富な課題の提供が望ましく、そのために外部教材を導入することとした。

2. 外部教材の選定

外部教材の選定に当たってとくに重視したのは、すでに学術機関等で多くの利用実績があること、レベル設定が明確な基準を用いてなされていること、リーディング／ライティング／リスニング／スピーキングの4技能をバランスよく伸ばすことができること、単なる知識習得よりも英語コミュニケーション能力育成を目的としているものであること、インタラクティブな課題を提供するオンライン教材であることの5点である。

選定した教材は世界中で7百万人によって使用されており、日本でも大学等への導入実績がある。また、ヨーロッパ言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages: CEFR)の基準に沿ってレベル設定がなされており、学習者が段階的にスキル習得を行うことができる。

導入教材は以下のように構成されている。大きく日常英語とビジネス英語のカテゴリに分かれ、それぞれに、ある設定でのコミュニケーションを学ぶことを目的とした学習単位(LP: Language Program=学習プログラム)が豊富に収められている。想定されているコミュニケーション場面は多岐にわたり、実践的な効果を期待できるものである。さらに、ひとつのLP内には、そのコミュニケーションを達成するために必要な語彙や文法、4技能を習得できる課題(アクティビティ)が、数個から100個超まで設定されており、学習者はすべてをインタラクティブに学ぶことが可能である。アクティビティの種類も多様で、文章理解やビデオ／音声を用いた聞き取り問題、条件を適切に反映させて文章を正しく書き直すパターン練習など、それぞれリーディング／リスニング／ライティング技能を伸ばす課題のほか、音声認識機能を用いて発音／発話問題にもインタラクティブに取り組むことができる。

3. 各科目の設計と運営

3.1. レベル設定から科目概要／科目目標決定まで

すでに述べたように、カリキュラム改訂の第一歩として、本学「教養的能力」の「外国

語力」を育成するための英語科目コアコンピテンシーに基づき、英語必修科目と選択科目をそれぞれ定め、必修科目の4科目8単位の学修をもって①「読む力と書く力：英文資料を読んだり、eメールなどを使い英文メッセージで用件を伝えたりすることができる」②「聞く力と話す力：資料を参考にしながら時事的なトピックの概要を理解したり、基本的な日常会話の表現を用いて英語でコミュニケーションをすることができる」の2つを達成できるよう科目設計を行った。導入教材のCEFR基準に照らし合わせ、基礎的なコミュニケーション練習から行うことのできるA1レベルに始まり、標準的な英語コミュニケーション能力を習得できるB2レベルまでを新カリキュラムで扱うこととした。この範囲に、必修科目（「基礎英語」「中級英語」）と選択科目（「上級英語」）を配置した。

さらに、コアコンピテンシーとCEFRの各レベル「全体的な尺度」から各科目の概要を決定し、それぞれのレベルのLPによって習得可能なコミュニケーションを検討しつつ、科目目標に落とし込んだ。

3.2. 2013年度春学期の授業設計と運営

3.2.1. 2種類のLP (=学習プログラム)

各科目に割り当てられたレベルには膨大な数の問題群が収められているが、その中から、各科目で履修者が学習すべきLPを教員が選定し、本学の基幹システムであるCloud Campus内科目ページにそれぞれのリンクを設置した。履修者は一旦教材システム内で初期設定を行えば、各LPリンクをクリックするだけで英語教材システム内の該当LPへと誘導されるような仕組みを構築した。提供するLPには次のような2種類のカテゴリを作った。①各科目の学習目標を達成できる必須の「科目目標LP」と②個々の履修者が自身の目的や関心に沿って選択可能な「自己目標LP」である。①はその科目の履修者全員が学習するもので、②は履修者があらかじめ設定されているLPの中から関心のあるテーマを選んで学習するというものである。与えられたものだけを学習するのではなく、学習者自身が興味のあるテーマを選ぶことにより、学習意欲の向上が期待できるという理由から取られた措置である¹⁾。必須の「科目目標LP」では、各科目ともこのカテゴリのアクティビティ総数が100-140程度となるよう設定し、また選択必須の「自己目標LP」では、アクティビティの総数が80以上となるよう、履修者がLPを選択し学習を行う形式とした。これらのアクティビティ数については、実証実験を行い、所定の学習時間を踏まえ無理なく1学期間で学習可能なアクティビティ数を算出した結果に基づいている。

教材の初期設定や使用方法、学習の仕方などについては、第1週目の授業でガイダンスのVODコンテンツを使用し説明した。また、英語科目は、ガイダンス視聴後、Cloud Campus小テストシステムを用いたアンケート形式の「学習プラン」で学期をとおしての学習計画を立てれば、すべてのLPへのリンクがアクティブになり、期末試験期間の終了までオープンしているよう設計した。これは、本学専門科目などで用いられている、コンテンツや課題が順次配信され一定期間後には出席認定期間が終了していくといった、段階

第4章 オンライン外部教材を用いた英語科目設計

的に履修者が受講を進めるよう誘導する設計とは異なっている。英語科目は、時間のあるときにいつでも自由に前倒しができるよう、そしていつでも遅刻減点なしに挽回のチャンスがあるよう設計し、複数の科目を履修する際の学習者負担を分散させることが可能となるよう計らった。

3.2.2. 2013年度春学期の評価方法

上述のように、各 LP には多彩なアクティビティが収められているが、さまざまな種類のアクティビティに満遍なく丁寧に取り組む場合と、得意なタイプのアクティビティなどを中心に部分的な取り組みを行った場合とでは、学習の質にばらつきが出る懸念があった。そこで、必須のものであれ選択必須のものであれ、指定している LP の完了率が 90% を超えない限り評価を行わないこととした。つまり、各 LP の完了率を評価の前提条件として設定し、それぞれ LP の正解率から点数化することとしたのである。成績評価においては、必須の「科目目標 LP」に 50 点、選択必須の「自己目標 LP」に 40 点、つまり LP 得点として 90 点を配分した。加えて、リスニングとリーディングの設問からなる TOEIC 型の英語実力試験である期末試験には 10 点を配分し、LP 得点に関わらず、期末試験は単位取得の必須条件として、受験を義務付けた。

さらに、英語能力の高い履修者は、短期間で規定の LP 学習を完了する可能性も考慮し、学期中に達成すべき教材学習時間を定め、それをクリアしないと期末試験の受験ができないよう英語教材システム内で設定を行った。このように、一定時間の学習記録が確認されなければ単位修得できないような仕組みを通じて学習時間の担保を行った。なお、教材学習時間とは、教材システム自体にアクセスした時間ではなく、実際に LP を学習した時間を意味する。この教材では、音声やスクリプトなどを各個人のメディアにダウンロードし、予習／復習が可能であるが、その時間は当然含まれていない。

2013 年度春学期の授業設計および運営の要点についてまとめる。導入初学期である 2013 年度春学期においては、履修者には必須と選択必須の LP 学習を求め、かつ一定の学習時間という全体的な枠組みを設定した。また、各 LP の完了率を評価の前提条件とし、正解率から LP 得点を算出した。そして出席認定に関しては、専門科目等とは異なり、開講から期末試験期間終了時までを正規の出席認定期間として、英語科目履修者は LP 学習に関しては「遅刻」なしで自由に学習を進められるようなシステムとした。

3.2.3. 2013年度春学期の教員／TA 作業

教員や TA の作業は以下のようなものであった。学期中、教員は、Cloud Campus 科目ページの「お知らせ」で学習に役立つ情報を提供したり、問い合わせの多い案件の説明や注意喚起を行ったり、つまづきやすい点について丁寧に説明するニュースレターを作成したりした。また、履修者の学習進捗が、教材システム内のデータ表示では把握しにくいことから、教材システムから学習状況が記載されているデータをダウンロードし、マクロにかけ、使用しやすいデータに加工して各履修者の学習状況を把握した。その加工データを

用いて、サポートや奨励が必要と思われる学生を抽出し、教員と TA で適切に指導を行った。

3.2.4. 2013 年度春学期の問題点

2013 年度春学期が終わり、次学期へ向けた改善点を検討した際、問題点として次のような点が挙げられた。①教材の初期設定に関する質問やトラブルが多い。②ガイダンスを視聴しても、教材にアクセスしない履修者が一定数見られる。③科目ページに設定されているリンクから指定された LP にアクセスせず、評価対象外の LP を学習してしまう場合がある。④履修者が自身の学習進捗を管理できない。⑤選択必須の「自己目標 LP」を適切に選択できない。⑥専門科目等とは異なり、一定量の LP 学習ごとに細かく締め切りを設定せず、自身のペースで学習を自由に進められるよう運営したが、学期末まで締め切りがないために学習を先送りにしてしまい、学期末ぎりぎりまで LP への取り組みを始めない履修者も現れた。上記のようなことから、秋学期に向けての改善策が講じられた。以下詳述する。

3.3. 2013 年度秋学期の授業設計と運営

3.3.1. 必修 LP と任意 LP への変更

2013 年度春学期では、先に述べたように、必須の LP と個人の目的や関心に沿って選択可能な LP にカテゴリ分けを行い、選択必須の LP については、選択範囲などに条件はあるものの、履修者は自由に選択したうえで学習を行った。この方式のねらいは、履修者に興味があるテーマを選ばせることにより、学習意欲を高めることだった。しかしながら、選択必須 LP には次のような問題点があった。「最低アクティビティ数が 80 以上になるよう」という条件を課して LP 選択を行わせていたのだが、その条件を理解していなかった等、履修者自身が自らの「行うべき学習」を管理しきれない場合が見られ、アクティビティ数不足で LP 得点が伸びない履修者が存在した。また、個人の選択によって学習する LP が異なるため、教員側が履修者の学習進捗を把握しにくく、奨励活動もやりにくいという点もあった。さらに、履修者も自身がどの選択必須 LP を学習したのか教材システム内で確認しきれず、TA や教員に問い合わせをすることが多かった。

このような問題に対処するため、2013 年度秋学期には、「個人の嗜好に従って選択する」という意欲向上につながる要素は残しつつ、その選択が煩雑にならない仕組みを検討した。そこで、履修者はみな同一の LP に取り組むこととし、これを「必修 LP」とした。ただし、さらに LP 学習を続けたい者は「任意 LP」に取り組むことも可能とし、その成果をもって「ボーナスポイント」を付与することとした。学習活動としてのわかりやすさを優先させたため、履修者にとっては、LP を自身で選択し学習するという自由度はなくなったが、指定された LP を順次学習していきながら、「任意 LP に取り組む／取り組まない」のような、ストレスのない選択を行う機会は残されているといえる。

第4章 オンライン外部教材を用いた英語科目設計

学習すべき総アクティビティ数にも変更を加えた。2013年度春学期の学習結果を踏まえ、2013年度秋学期には、「必修 LP」に含まれている総アクティビティ数を、「基礎英語」および「中級英語」では400程度、「上級英語」では350程度とした。さらに、ボーナスポイントが得られる「任意 LP」については、100程度のアクティビティを学習できるよう準備した。春学期と同様に、Cloud Campus 科目ページの各 LP 名をクリックすると、該当する英語教材内 LP のアクティビティ一覧ページに誘導されるように設定した。

3.3.2. 2013年度秋学期の評価方法

成績評価においては、2013年度春学期と同様に、それぞれの LP を満遍なく学習した場合のみ評価対象とする方針は継続させることとし、完了率90%以上を達成している LP のみ評価対象とした。そして、各 LP の正解率に従って LP 点の素点を計算した。任意 LP は、任意の学習により必修 LP 得点を補えるボーナスポイント算出の対象となるので、完了率90%以上の条件は設定せず、アクティビティから点数化することとした。ただし、必修 LP と任意 LP の1アクティビティあたりの点数には応分の差をつけ、科目の要件である必修 LP 学習を重視する姿勢を打ち出した。

成績配分についても前学期を踏襲し、LP 得点に90点、期末試験に10点を配分し、LP 得点が合格点を超えていても、期末試験の受験を単位修得のために必須とした。さらに、10点を上限としてボーナスポイントを認めしたが、これは LP 得点と期末試験得点の合計が100点を越えない場合のみ加算される。また、学期中に達成すべき教材学習時間を設定し、短時間の学習では期末試験の受験ができず、従って単位取得もできないシステムにも変更はない。期末試験に関して変更を加えた点としては、試験期間を前倒ししたことである。試験期間を学期末に限らず、十分な LP 学習を完了すれば、いつでも受験可能にすることとした。

3.3.3. 2013年度秋学期の教員/TA 作業

2013年度秋学期には、前学期にもっとも質問が多かった初期設定作業を、授業開講前に担当教員が受け持った。1アカウントずつログインして設定するこの作業は、開講前に行わなければならない、時間的にも厳しかったが、それでも初期設定でつまづく履修者を減らすため教員が対応した。

以下の作業は前学期と同様である。学期中、教員は、Cloud Campus 科目ページの「科目のお知らせ」やページ冒頭部分のニュースセクションで、学習に役立つ情報を提供したり、問い合わせの多い案件の説明や注意喚起を行ったりし、英語学習に役立つニューズレターを作成したりした。やはり、履修者の学習進捗を教材システム内のデータから把握するのは困難なため、教材システムから学習状況が記載されているデータをダウンロードし、マクロにかけ、使用しやすいデータに加工して、履修者の LP 学習状況を確認しサポートを行った。

2013年度春学期では、学習すべき期間をとくに設定しなかったため、学期末まで学習を

始めない履修者が存在した。その点を鑑みて、2013年度秋学期では、必修LPを前後半の2つに分け、それぞれ推奨学習期間を設けた。その期間に合わせ、学習を奨励しサポートを行った。また、同名のLPが複数存在するなどの理由で、英語教材システム内の学習進捗表示ページでは履修者自身が進捗を把握することが難しく、結果的に科目が指定しているLP以外を学習してしまうケースが見られたので、他科目と同様に、Cloud Campus内の学習進捗管理ページでLP学習の結果を表示できるようシステム改修を行い、学期の途中から利用することとなった(システム改修についてはまとめて後述する)。そのデータ更新作業も教員が行った。

3.3.4. 2013年度秋学期の改善点まとめ

2013年度秋学期に講じた改善策は以下の5点である。①教材の初期設定は開講前に教員が行い、履修者がスムーズにLP学習に取り組めるようにした。初期設定に必要であった教材トップページへのリンクをなくし、Cloud Campus科目ページの各LPリンクから教材にアクセスするよう周知徹底をした。②選択必須のLPを指定せず、すべて必須のLPとして、学習の範囲や順序をわかりやすくした。③履修者が自身の学習進捗を把握しやすいよう、Cloud Campus上の授業管理ページに英語科目の学習進捗を表示できるようにした。④推奨学習期間を設定し、その期間内に特定のLPを完了するよう奨励した。⑤期末試験期間を拡大し、十分なLP学習を行っていれば、学期中いつでも受験できるようにした。

4. 基幹システム Cloud Campus とのシステム連携

4.1. Cloud Campus から教材システムへのアクセス

外部教材を導入するにあたり、まず開発が行われたのは、本学の基幹システム Cloud Campus から直接教材にログインを可能とするシングルサインオンであった。シングルサインオンとは、科目ページのLPリンクをクリックすると、英語教材システムからユーザIDやパスワード入力を求められることなく、当該のLPへアクセスできる仕組みのことである。この点について以下説明する。

科目ページ内に設置したLPリンクをクリックすると、ログイン中の履修者IDを用いて教材システムのログイン認証コマンドを実行し、認証が通ると一定時間後に同一フレーム内で指定したLPページURLにリダイレクトする。LPへのリンク機能は汎用化させており、科目ページ設定時に、「ログイン認証コマンド」と「リダイレクト先URL」が運営側で自由に指定できるようになっている。

4.2. 顔認証および顔監視機能

LP学習および期末試験受験に際しては、本人確認のための顔認証をパスしなくてはならない。また、単位修得において必須である期末試験の受験時には、顔認証に加えて顔監

第4章 オンライン外部教材を用いた英語科目設計

視も行われる。

Cloud Campus 科目ページ内に設置した LP/期末試験リンク機能には顔認証機能の ON/OFF と顔監視機能の ON/OFF が設定できるようになっている。顔認証機能の ON 設定には「Cloud Campus ログイン中に 1 回 (=ログイン時認証状況との照合)」と「リンククリック時毎回」の 2 種類が用意されている。LP 学習時には前者が用いられる。Cloud Campus のセッション情報 (ログイン時認証状況) に保存されている認証ステータスを確認し、未認証 (顔認証以外の方法でログインしている場合が相当する) であれば、ポップアップで Flash を用いた顔撮影画面が表示され、認証処理が行われる。認証済みであれば当該機能はスキップし、シングルサインオン処理を行う。期末試験受験時には後者が用いられる。これは、リンクをクリックするたびにポップアップで Flash を用いた顔撮影画面が表示され、登録画像と照合して認証処理が行われるものである。

顔監視機能が ON に設定されていれば、一定時間ごとに自動で画像を撮影し、サーバに送信する。この機能はウェブテスト形式の期末試験で運用されている。期末試験リンクをクリックすると、まず顔認証処理が行われ、その後に顔監視機能が起動する。自動撮影だが、画像が最低 1 回は正しく送信されることを確認してから試験画面に切り替わるようになっている。

4.3. 英語教材システム内学習記録の Cloud Campus 学習進捗管理画面への反映

英語教材システムからダウンロードできる学習記録を、専用 Excel マクロプログラムを用いて学生 ID/指定 LP 単位で集計加工し Cloud Campus にインポートすることで、Cloud Campus 授業管理画面上に達成度合いや LP 得点が表示できるようになっている。

履修者が英語科目の進捗状況を確認できるページには 2 種類あり、「授業管理」画面では、履修中の他科目と同一のページで閲覧できる。VOD のガイダンスコンテンツ視聴や小テストシステムを用いた「学習プラン」、期末試験などの進捗については、他科目と同様の記号を用いており、推奨期間に取り組みを完了させたかどうか判断しやすい。必修 LP については、「完了率 90%以上/正解率 60%以上」という条件が整えば特別のマークが表示されるようになっている。また、このページでは LP 学習時間も確認できる。「外部教材評価管理」画面では、必修 LP の完了率と正解率が示され、それぞれの取得点数やその合計も確認できる。任意 LP については、ボーナスポイントの総計のみ表示される。

5. 2014 年度へ向けての取り組み

2013 年度秋学期を終え、改善が見られたのは以下の 2 点である。①推奨学習期間を定めたことにより、履修者に標準的な学習ペースを提示することができた。遅刻減点措置を取らず、また推奨学習期間終了について一切の個別リマインドを行わなかったにも関わらず、推奨学習期間直前と直後に LP 学習が進む履修者が相当数いた。②期末試験期間を前倒しして設定したことにより、意欲的な履修者にとって、LP 学習から期末試験への流れが非

常にスムーズになった。LP 学習を充分に行っているのに、期末試験期間が始まらないために英語学習への勢いが減じてしまうことを回避できたように思われる。

一方で、さらなる改善策が必要なポイントも明らかになった。まず、①ガイダンスコンテンツを視聴しても、教材システムへアクセスしない履修者が一定数いることである。2013年度秋学期には、初期設定を教員が行ったことにより、アクセス時のつまずきは減ったものの、異なる観点からのさらなる誘導が必要であると判断された。そこで、2014年度春学期には、ガイダンスコンテンツを改修し、ガイダンス視聴の直後に教材システムへのアクセスを試してみるよう強く意識づけた。また、各科目でアクセスのための必修 LP 1 リンクをガイダンスコンテンツに近接して設置した。ガイダンス視聴や教材アクセスなど、LP 学習に入る前の準備段階についての推奨期間も設け、期間終了後すぐに、ガイダンス視聴済であり教材未アクセスの履修者を抽出し、注意喚起を行った。さらに、②推奨学習期間の設置そのものには、上述したように一定の効果があることがわかったが、学期中に前後期という2つの期間しかなかったために、最初にうまく学習を始めることのできなかった履修者がそのまま意欲を失ってしまうというケースが見られた。よって、2014年度春学期には推奨学習期間を4期設け、より適切に履修者へのサポートの機会を得られるようにした。③学習進捗確認については、教材システム内ではなく、Cloud Campus でよりわかりやすい情報を確認するよう履修者を誘導するため、データインポートの頻度を増やした。

2014年度秋学期以降も、PDCA サイクルを適切に運用し、科目の設計や運営について検証を続ける予定である。とくに、LP のテーマや学期をとおして学習すべきアクティビティの総数などについて検討し、学習の内容や量がともに当該レベルの科目としてふさわしいものであるかを見直したい。また、評価や学習手順など、履修者にとって理解しやすい運営がなされているかも重要な振り返りのポイントとなる。

注および参考文献

- 1) Keller, J. M., 'Development and use of the ARCS model of motivational design,' "Journal of Instructional Development," 10 (3) (1987) pp. 2-10; Knowles, M. S., "The Modern Practice of Adult Education: Andragogy versus Pedagogy," Prentice Hall/Cambridge, (1980)

本稿は、2013年9月23日に日本教育工学会第29回全国大会にて筆者が行った発表「外部教材を用いた授業設計とシステム連携：オンライン大学における英語科目の設計」の内容をまとめたものである。